

〈講演筆記〉 書写山の一遍上人

竹村 牧男

はじめに 法燈国師心地覚心と一遍上人など

姫路市はお城で有名ですが、実はそれと並んで書写山という重要な歴史遺産、文化遺産があります。私はこちらが大変貴重だと思っています。書写山が開創されたのは、平安期の康保三年（九六六）、古さでいえばもちろん書写山のほうが姫路城よりずっと古いわけです。ここは西の比叡山と呼ばれ、天台宗の学問と修行の道場でした。ラスト・サムライで有名になった大講堂や食堂等は、若い僧らの学問の場でした。ここで修学していたことは有名です。宮本武蔵もいたようです。このことはかつて大河ドラマでも紹介されていました。また、今日の臨済宗の源流を形成した大燈国師も、若い時にここで勉強していたということです。私にとっては、このことも興味深いことです。

では、この書写山で若い学生を指導したのは、どのような人だったのでしょうか。おそらく、当時の一級の学僧らが指導に当たっていたことと思います。そうした教師の一人に、法燈国師心地覚心（一二〇七―一二九八）がいたといえます。覚心は当初、密教を学び、宋にわたって、有名な禅籍『無門関』の著者・無門慧開に就いて修行し

て印可を受け、日本に帰ってからは和歌山県由良の地に興国寺を開創しました。径山寺味噌を伝えたことで有名で、また虚無僧の普化宗に関係あるとも言われています。

実は、この法燈国師心地覚心と、時宗の開祖・一遍上人（一二三九～一二八九）との間に、面白い話があります。宝満寺にて、由良の法燈国師に参禅し給ひけるに、国師、念起即覚の話を拏せられければ、上人かく讀みて呈したまひける。「となふれば仏もわれもなかりけり南無阿弥陀仏の声ばかりして」。国師、此歌を聞きて「未徹在」とのたまひければ、上人またかくよみて呈し給ひけるに、国師、手巾薬籠を附属して印可の信を表したまふとなん。「となふれば仏もわれもなかりけり南無阿弥陀仏なむあみだ仏」。

この話は一遍の念仏思想、浄土教思想の本質を非常によく伝えるものですが、最近の学界では、後世に作られた話だということで、実話ではないようです。しかし一遍が覚心にかなり関心を抱いていたことは事実のように、『播州法語集』には覚心にふれた言葉が見出されます（四〇）。なお、宝満寺は神戸市長田区にあり、文永三年（一二六六）、覚心が再興した寺院であるということです。覚心が近くの書写山で教えたということもあったのでしよう。

今の一遍は、念仏札の賦算のために諸国を遊行し、また踊り念仏を始めたことで有名ですが、晩年、書写山にお詣りしたとき、「諸国遊行の思ひで、ただ当山巡礼にあり」と語ったということです。『一遍聖絵』の絵巻の文章に出てくることです。一遍がそれほどまでに格別の思い出であつたともらした背景には、一体、何があつたのか、私は大変興味深く思うのです。今日は、このことを考えてみたいと思うのですが、それには、まずはこの書写山を開創した性空上人（九一〇～一〇〇七。異説あり）のことを知っておくべきでしょう。

性空上人の伝記

性空は橘氏の家系で、もとより宗教者の資質を持つて生まれた人のようです。いろいろと神秘的な話があるので、幼少の日よりなくなるまで、常に微笑をたたえ慈悲深い表情でやさしい言葉遣いであり、けっして粗暴な言葉を吐かなかつたといえます。早くから出家したいという希望を持つようになったのですが、両親は許しませんでした。承平七年（九三七）、父が亡くなり、母に従つて日向の国に下つています。数年後、母に文殊菩薩の化身が現れ、子どもの出家を妨げてはならないと諭されて、ようやく出家を許されたといえます。この時、三六歳になっていました。

比叡山に上つて、天台宗中興の祖と言われる慈恵大師良源（九一二―九八五）について学問と修行に取り組みます。しかしその後、間もなく、どういうわけか九州の霧島の地に入り、人里はなれた山奥で修行しました。食べ物もままならぬような場所でしたが、その環境にもよく耐えて仏道修行なさつたということです。あるときは、夢に御馳走をいただいて、それで覚めた後もおながすかなかつたといえます。また夢に誰かが食事を運んでくれるのを見て、覚めるとそのとおり実際に置かれていたとのことです。あるいは読誦している經典から、美しいお米がぱらぱら飛び出してきたり、窓の下に温かいおいしいお餅があつたりしたことが伝えられています。なんとも神秘的な方です。

着ているものはぼろぼろだったようで、きわめて寒い夜に寒さを耐えるべく經典を読誦していると、温かそうな蒲団が上の方から自然に降りてきたといえます。それで、身体は立派で光輝いていたとのことです。

二、三年の後でしょうか、福岡県と佐賀県の境あたりの背振の山に移って、さらに修行します。それが一八年ほど続いたとのこと。三九歳のときには、『法華経』のすべてを暗誦されたということです。あるとき、神秘的な老僧が現われ、一枚の紙を性空に渡しました。性空がこれ握ると、老僧が耳元で、「福報遍照、法華光蔵、応正等覺」とささやいたとのこと。背振山での修行のあいだ、若護法・乙護法の二人の童子が世話をしました。

実は一遍も再出家したのが三六歳で、当初、山岳霊場にこもって修行しています。また性空は名門の出なのに、常に清貧を守り、権力から遠ざかっていました。そうした生きざまは、どこかで一遍と共通なものがあると思います。

書写山における性空上人 如意輪観音との出会い

性空はひととおり修行がなつて、化他のために山をおり、都に向かいます。二人の童子も一緒です。常に五色の瑞雲が性空の前方にたなびいて道案内したといひます。ところが、播磨の今の書写山近くにきて雲が消えてしまい、ここは釈尊が説法した霊鷲山と同じ山で、ここに入れば六根清浄を得るとのお告げがあります。そこで性空はこの山に入り、さらに修行していくことになります。性空の書写山入山は、康保三年（九六六）、性空五七歳の時であったということです。

性空は山中で日夜、『法華経』を読誦しつつ修行していましたが、動物たちが性空のもとにやってきて、慣れ親しんでじゃれていたようです。食事の時はたくさん集まってきて、性空はまず動物たちに食べ物を実施したのでした。しかし、身体にのみ・しらみはいなかったといひます。着るものは常に紙衣で、すまいも粗末なものでした。胸に

は阿弥陀仏像を彫刻してあつたというのですが、入れ墨のようなことをしていたのでしょうか。この性空に、近きも遠きも、男女・老少を問わず、帰依しない者はありませんでした。多くの学僧や当時の優れた知識人等も、性空の評判を聞いて、書写山に来て結縁したことです。性空に会えた人は仏に会った思いをし、一言でも聞けば仏説をきいたかと思うのでした。性空は出家以降、ひとときも病氣にかかったことがなく、生涯、一心に誦経したのでした。非常に寡黙の人であり、高僧や重要人物と会う際も、先方が種々話をしても一言、二言しゃべるだけで、あとは瞑想するがごとくであつたといひます。

よく良寛とアッシジのフランシスコが対比されるのですが、性空もアッシジのフランシスコに似たところがあるように思います。

入山して数年後、書写山の今、摩尼殿のあるところ、急な崖のところですが、そこに大きな桜の木がはえていて、ある日、天人が降り立って、次の詩をうたつて礼拝しているのに出会いました。

稽首す、生木の如意輪に。能く有情の福・寿の願を満たし、亦た極樂に往生せん願を満たす。百千俱胝の心の念ずる所なり。(稽首生木如意輪、能満有情福寿願、亦満往生極樂願、百千俱胝心所念。『元亨釈書』では、一切衆生心所念)

そこで性空は枝をはらい、その生木の太い幹に弟子の安鎮に命じて如意輪観音菩薩像を彫らせ、やがてそれをお祭りするお堂を建立したとのこと。像の高さは一尺五寸と伝えます。このとき、美しい鳥が集まつてお祝いの鳴き声を発し、お堂の下には清泉が湧出して、病氣の者がこれを飲むと治つたといひます。こうしたことも、性空は天人と感應道交できた方だつたということを表わしているわけです。それは性空の入山間もない、天禄元年(九七〇)のことといひます。

このことが事実だとすると、その観音像は今日存在していませんが、しかし最近、性空上人一千年御忌の折り（二二〇〇六年）に、鎌倉時代の作という、桜の木でできた如意輪観音像が発見されたようです。小学館ウィークリーブック『古寺を巡る』の第二四、『円教寺』に掲載されているのを見ましたが、截金模様も鮮やかな、大変なおやかな、美しい菩薩像でした。ちょうど一尺五寸くらいに見えます。性空の原作を模したものなのかもしれません。実は一遍は、あとで述べるように、この性空が作った如意輪観音を拝みたかったのです。

性空上人に帰依した人々

性空は入山一〇年後、書写の最高峰・白山で、『法華経』読誦の功德により六根清浄を得ます。その清らかな人となりと優れた境涯とによって、多くの人々の帰依をうけました。もつとも有名な人は、花山法皇（九六八―一〇〇八）でしょう。花山法皇は寛和二年（九八六）と長保四年（一〇〇二）の二度、書写山を訪れています。花山法皇は性空と結縁ののち比叡山や熊野に参籠修行し、長谷寺の徳道上人が創始した西国三十三所巡礼が途絶えていたのを、性空らとともに再興したとされています。この巡礼は観音巡礼で、書写山円教寺も二七番札所となっています。

また、『日本往生極楽記』の作者・寂心（俗名は、よししげやすたね慶滋保胤。一〇〇二年寂）も書写山にしばしば通い、性空と親しく交わった人です。寂心が沐浴する湯釜がほしいと思っていたところ、湯釜が性空から届いたという話もあります。ちなみに、長徳元年（九九五）冬のこと、多武峰の増賀上人が上質の紙をほしく思っていたところ、播磨の杉原紙が贈られてきたということです。

性空の生前ではないのですが、後白河法皇（一二七―一九二）も書写山に詣でています。承安四年（一二七四）四月、嚴島神社参詣の帰途、七日の間、参籠したといえます。そのとき、書写山の本尊であるかの如意輪観音を拝んだということです。この観音像はめったに拝めないものののです。ちなみに、摩尼殿の名は御白河法皇から贈られたものといえます。如意輪観音が右の第二手にお持ちの如意宝珠、すなわち摩尼宝珠に由来します。

後白河法皇は『梁塵秘抄』の撰者として有名ですが、『梁塵秘抄』には、何回か書写山のことが出てきますから、法皇にはきっと深く性空を信仰するお気持ちがあったことでしょう。中に、「聖のいます山はどこそぞ。それは箕面に書写の山」という歌謡もあります。

性空上人と普賢菩薩

『古今著聞集』によりますと、いつの頃から性空が法華經を書写していると、閻魔王宮より使いが来て、性空が写經することにより、罪業で地獄に堕ちた衆生が皆、人間界や天上界、または浄土に生れるので、地獄も荒廃している。どうか性空上人、写經をやめてください、と頼んだといえます。これに対し性空は、「このことは私には関係ないことです。釈迦牟尼仏にお申しなさい」といったということです。

ところで、性空は遊女を通じて普賢菩薩に出会ったといえます。そのことは種々伝えられていますが、『十訓抄』十五の説を見てみましょう。

書写の性空上人、生身の普賢を見奉るべきよし、寢寐に祈請し給ひけるに、ある夜、転經に疲れて、經をにぎりながら、脇息によりかかて、しばしまどろみたる夢に、生身の普賢を見奉らむと思はば、神崎の遊女の長者

を見るべきよし見て、夢さめて、奇異の思ひをなして、かしこへ行き向ひて、長者が家におはしつきたれば、ただいま京より上日の輩下りて、遊宴乱舞のほどなり。長者、横敷に居て、鼓を打ちて、乱拍子の次第をとる。その詞にいはく、

周防室積の中なるみたらひに風は吹かねどもささら浪立つ

と。上人閑所に居て、信仰、恭敬して、横目もつかはず、まもりぬ給へり。この時に、たちまちに普賢菩薩の形に現じ、六牙の白象に乗りて、眉間の光を放ちて、道俗、貴賤、男女を照らす。すなはち微妙の音声を出して、実相、無漏の大海に五塵六欲の風は吹かねども随縁真如の波の立たぬ時なし

と。感涙おさへがたくして、眼を開きて見れば、またものとごとく、女人の姿となりて、周防室積の詞を出す。眼を閉づる時は、また菩薩の形と現じて、法門を演べ給ふ。

かくのごとくたびたび敬礼して、泣く泣く帰り給ふ時、長者、にはかに座を立ちて、閑道より上人のもとへ来りて、「このこと口外に及ぶべからず」といひて、すなはちにはかに死す。異香、空に満ちて、はなはだ香ばし。長者の頓滅のあひだ、遊宴興さめて、悲涙することかぎりなし。上人、ますます悲涙におぼれて、帰路にまどひけりとなむ。

かの長者、女人、好色のたぐひなれば、たれかはこれを権者の化作とは知らむ。仏菩薩の悲願、衆生化度方便によりて、形をさまざまに分ちて、示し給ふ道までも、賤しきにはよらざること、かやうのためしにて心得べし。

性空は普賢菩薩をも大変、尊敬していたようです。六牙の白象については、『法華経』「普賢菩薩勸発品」に、「此の経を読誦せば、我、爾の時、六牙の白象王に乗り、大菩薩衆と俱に其の所に詣りて、而も自ら身を現し、供養し

守護して、其の心を安んじ慰めん」とあるのによるものです。ここの主題は、仏・菩薩の悲願の深さです。普賢菩薩が謳った「実相、無漏の大海に五塵・六欲の風は吹かねども、随縁真如の波の立たぬ時なし」は、大変深い内容を湛えているものです。仏の深い広大な心は、無明・煩惱の影響はまったく受けなければ、苦しみに沈む衆生という機縁に随って、ひとときも休むことなく救いの活動のために働いてやまない、という意味です。清浄無垢の存在である仏は、その自分のあり方を消して、自ら苦海に降りてきて、衆生済度に余念がないということです。このことは、性空の把握した仏道のありかを示しているものでしょう。ちなみに、この伝説がお能に取り入れられて、謡曲の「江口」となっています。

参考までに、『梁塵秘抄』には、「草の庵の静けきに、持経法師の前にこそ、生々世々にも値いがたき、普賢菩薩は見え給う」「行住坐臥にこの経を、読む人あらば隙もなく、普賢遙かに尋ね来て、縁をば結びたまいきり」といった歌があります。

こうして性空は実際に普賢菩薩に出会ったということになっているのですが、そのことにつながる次の話もあります。『往生要集』の作者として有名な恵心僧都源信は、やはり性空を尊敬していて、二人の間柄は大変親密だったようです。源信は『往生要集』の作者であり、称名念仏でも救われることをはつきりさせた人といえます。なお、『源氏物語』の宇治十帖に出る、浮舟を救った横川の僧都のモデルとして知られています。その源信と性空との間に、次のようなことがあったといえます。

此の上人は無智の人なり。法文いひてきかせむとて、恵心僧都（九四二―一〇一七）・檀那の僧正（覚運。九五三―一〇〇七）などおはしまして、「住果の縁覚は仏所へはいたるか」ととはれけるを、「到るもいたらぬもいかにも侍りなん。無益なり」といはれければ、「法門を沙汰してこそ、恵眼は開く事にて侍れ。かやうの田舎

には候はじとて参りて侍る也」といはれければ、上人、「かやうの法門は、普賢のおはしまして解脱せしめ給ふなり」と答ふ。時に恵心帰敬のおもひに堪へず、礼拝して、檀那に、「此の聖ほめ申させ給へ」と申されければ、「身色如金山、端嚴甚微妙、如淨瑠璃中、内現真金像」（『法華經』「序品」）と伽陀を誦してをがまれけり。

源信らが教理の議論をしてこそ悟りの眼も開けてくるというのに対し、性空は普賢菩薩が問題を解決してくれるというのでしよう。普賢菩薩に出会えば、議論も何も要らないということだと思ひます。このような言葉は、実際に普賢菩薩に出会っていたからいえる言葉だという感じがします。

ちなみに、性空は晩年のことですが、源信を書写山に呼んで、自分の持っていた書物を供養させています。性空は源信に書物を供養させて、源信が帰っていく途中、亡くなるのでした。

性空上人と和泉式部

性空を慕った有名な人に、和泉式部（生没年未詳。生年は九七七年ごろか）がいます。和泉式部がまだ若い頃のことなのですが、一乘天皇の中宮である上東門院彰子（藤原道長の娘）が書写山に性空を尋ねたところ、性空は行の最中だからということ、会わなかったといひます。そこで彰子の侍者であった和泉式部は、歌を残して山を降りました。その歌は、

暗きより暗き道にぞ入りぬべき遙かに照らせ山の端の月

という歌でした。この歌は、『法華經』「化城喻品」の、「衆生は常に苦悩し盲冥にして導師無く、……冥き従り冥きに入り、永く仏名を聞かず」に基づいていると言われます。この歌は、鴨長明によって、「言葉も姿も、殊の外

たけ高く、又けしきもあり」(『無名抄』)と評価されたほどの歌です。仏道が関係する歌では、月は、一般に真如を意味したりしますが、ここではいうまでもなく、その真如を体得していると見なされる性空その人を意味しています。性空は和泉式部にとっても尊敬のまどだったのです。

性空は、残されたこの歌を見て、一行を呼びもどして、種々教えを説き、和泉式部に対しては次の歌を返したのです。

日は入りて月まだ出でぬたそがれに掲げて照らす法の灯

余談ですが、当時、熊野詣が盛んになっていました。特に後白河法王の熊野詣好きは有名です。当時の流行にあやかっただのか、和泉式部がのちに熊野に詣でたとき、月の障りとなって、私はお詣りできないと言い出したことがあります。このとき熊野の神から、浄不浄を問わずお詣りしてさしつかえない、私はどんな人でも救うのだというお告げがあったといいます。

実は一遍もあとで述べるように、熊野の本殿に籠って、信不信を問わず念仏で救われるという極意をさずかります。ここで和泉式部と一遍とが結びつくので、のちに謡曲「誓願寺」が生れることになります。そこに性空は出てきませんが、私は性空を介しても、和泉式部と一遍とが結びつくように思います。そのことは、のちに述べたいと思います。

一遍上人の伝記

一方、一遍は法然―証空の流れに出た浄土教家といえます。一遍は延応元年(一二三九)、河野通広の子として

伊予道後に生まれました。河野家は河野水軍として世に名高い、武家の家柄でした。以下、『一遍聖絵』によって記述しますと、宝治二年（一二四八）、母の死に会い、のち仏門に入ったようで、さらに建長三年（一二五二）、太宰府の聖達（証空門下）につき、以後一三年間、浄土教を学びます。弘長三年（一二六三）、父の死にあい、いったん伊予に戻ります。還俗して結婚もしたようですが、親類間にむずかしいことがあったようで、再度、仏道を志し、また聖達についたと見られます。このとき、聖戒（実弟か義弟と見られる）と一緒にした。その後、弘長八年（一二七二）春、信州善光寺に参詣し、このとき二河白道の図を写して、伊予に帰りました。この年の秋、伊予の窪寺にて念仏三昧の修行をし、そこで得た一つの深い肯き（已心領解の法門）を、「十二不二頌」に表わしました。それは、「今・ここでの一念の念仏の中に、十劫の昔の弥陀の正覚と一体化し、娑婆と極楽も一体化し、まさに無生の生という真理を証する」という意味のものです。さらに弘長十年（一二七三）、伊予浮穴郡菅生の岩屋寺に参籠します。このとき、聖戒は随侍して給仕するのです。

これらの修行のち、弘長一年（一二七四）二月八日、超一・超二・念仏房を伴って伊予から摂津の四天王寺に向かい、ここで参籠、自誓授戒し、以後、念仏札の賦算の旅に出ます。自分が納得し得た弥陀の救いを人々に伝えようと、遊行に出立したのです。この四天王寺は聖徳太子が建立したのですが、その西門が極楽浄土に直結していると考えられていました。『梁塵秘抄』にも、「極楽浄土の東門は、難波の海にぞ対^{むか}へたる、転法輪所の西門に、念仏する人参れとて」（二七六）とあります。そのような了解をふまえて、四天王寺を出発点に選んだのでしょうか。一遍の旅の目的は念仏札の賦算にありました。その念仏札には、「南無阿弥陀仏決定往生六十万人」と書かれています。この六十万人というのは確定した数字ということではなく、要は一切衆生という意味です。この六十万人ということは、一遍の「六字名号一遍法、十界依正一遍体、万行離念一遍証、人中上々妙好華」という詩の各句の

一番最初の字を取ったものともいわれますが、一方『一遍聖絵』（橋俊道・梅谷繁樹『一遍上人全集』）によれば、

仏力観成の要門は諸仏の大悲、ひとへに勤苦の衆生にほどこし、無常超世の本誓は如来の正覚、しかしながら常没の凡夫にとなへて三祇の起行功を衆生にゆづり、六字の名号証を一念に成ず。かるがゆゑに、十劫の成道は凡聖の境界を尽くし、万徳の円明なることは報仏の果号よりあらはれて、頓教の一乗、十界を会して凡をこえ聖をこえ、一遍の称名、法界に遍じて前なく後なく、有識含靈みなことごとく安樂の能人、無極の聖と成ずる、他力難思の密意をつたへて、一切衆生決定往生の記莂をさづくるものなり。

とあります。記莂とは、その人の未来について、必ずこうなると予言し保証するものです。つまり、一切衆生の往生は決まっているということを伝えようとするのが、念仏札を配る意味なのでした。

一遍上人の熊野参籠

その後、一遍は高野山から熊野へと向かう途中で、ある一人の僧に念仏の信心を勧め、念仏札を受け取るよう言ったのですが、その僧は信心が起きないからと言って断固受け取らなかったのです。しかしまわりに人が集まってきたりして、一遍はついに強引に手渡ししてしまったのです。しかし一遍にとってはこのことが大きな問題となり、ついに熊野本宮に参籠したわけです。以下、『一遍聖絵』によって見ておきましょう。

この事思惟するに、ゆゑなきにあらず。勧進のおもむき、冥慮をあふぐべしと思ひ給ひて、本宮証誠殿の御前にして願意を祈請し、目をとちていまだまどろまざるに、御殿の御戸をおしひらきて、白髪なる山臥の長頭巾かけて出で給ふ。長床には山臥三百人ばかり首を地につけて礼敬したてまつる。この時、「権現にておはしましけ

るよ」と思ひ給ひて、信仰しいりておはしけるに、かの山臥、聖のまへにあゆみより給ひての給はく、「融通念仏すむる聖、いかに念仏をばあしくすすめられるぞ。御房のすすめによりて一切衆生はじめて往生すべきにあらず。阿弥陀仏の十劫正覺に、一切衆生の往生は南無阿弥陀仏と決定するところ也。信不信をえらばず、淨不淨をきはらず、その札をくばるべし」としめし給ふ。後に目をひらきて見給ひければ、十二三ばかりなる童子百人ばかり来たりて、手をささげて、「その念仏うけむ」といひて、札をとりて、「南無阿弥陀仏」と申しつづちもなくさりにけり。

このように一遍は、信不信を問わず、一切の者がすでに救われているという世界があることを、ここにあらためて自覺したのでした。『一遍聖総』によれば、このあとで一遍が、「大権の神託をさづかりし後、いよいよ他力本願の深意を領解せり」と語ったということです。

この体験は、一遍にとって画期的なものであり、のちに、「我法門は、熊野御夢想の口伝なり」ともいい、あるいは次のようにも言っています。

熊野権現、「信不信をいはず、有罪無罪を論ぜず、南無阿弥陀仏が往生するぞ」と示現し給ひし時、自力我執を打払ふて法師は領解したりと云々。常の仰なり。（『播州法語集』、五一）

したがって一遍の法門は、信によらず、意識の分別によらず、ただひとえに名号によって救われる道であり、その救いは一念の念仏のうちに機法一体となつて、阿弥陀仏と成就するという独特のものとなっています。ちなみに「頭の弁殿より念仏の安心尋ねたまひけるに、書いて示したまふ御返事」の中には、「わが機の信不信・淨不淨・有罪無罪を論ぜず、ただかかる不思議の名号をさき得たるをよろこびとして、南無阿弥陀仏をとなへて息たえ命をはらん時、必ず聖衆の来迎に預りて無生法忍にかなふべきなり」とあります。

一遍上人の浄土教思想

一遍においては、信不信を問わず、南無阿弥陀仏と唱えれば救われるされるのですが、なぜ名号を唱えれば救われるのでしょうか。それは、浄土教というものを詳しく解説しなければならぬのですが、簡単に言いますと、まず、『無量寿経』によれば、阿弥陀仏の本願に四八願がある中、第一八願に次のようにあります。

第十八願　たとい、われ仏となるをえんとき、十方の衆生、至心に信樂して、わが国に生れんと欲して、乃至十念せん。もし、生れずんば、正覺をとらじ。

ですから、一〇回でも念仏すれば、極樂往生は間違いないはずです。

さらに、『無量寿経』卷下冒頭に、次のようにもあります。

十方恒沙のもろもろの仏・如来は、みなともに無量寿仏の威神功德の不可思議なることを讃歎したもう。あらゆる衆生、その名号を聞きて、信心歡喜せんこと、ないし一念もせん。至心に廻向して、かの国に生れんと願わば、すなわち往生することをえて、不退転に住すればなり。

ですから、一回の念仏ですら、救われるはずです。

しかし『観無量寿経』には、次の句があります。

上品上生とは、もし衆生ありて、かの国に生れんと願う者、三種の心を発さば、すなわち往生す。なにをか三心とす。一には、至誠心、二には、深心、三には、回向発願心なり。三心を具うれば、必ずかの国に生まる。

このことをふまえて、前の第十八願に返って見ますと、そこにも、「至心に信樂して、わが国に生れんと欲して

（至心・信樂・欲生〔我國〕）とあつて、確かにこの三心をそなえて念仏するときとあります。実はこの三心のところ、浄土教で大きな問題になつていくのでした。一遍もこのことを深く尋ねて、ついに次のような了解に達します。善導『観經疏』『散善義』の三心の説明に基づきつつ、至誠心は、自己の心を捨てて弥陀の本願に帰することであり、深心は、自己の身を捨てて弥陀の本願に帰することであつて、この二心はすなわち自己の身・心を捨てて本願に誓われた名号に帰することだと解します。こうして、至誠心・深心と、心とあつても実はそれは名号に帰することだということです。

さらに廻向発願心も、名号を唱えるとき、それまで自力修行による多少の善根と名号に具わるあらゆる功德とが一つとなり、自己と阿弥陀仏が一体となることだといひます。これも、名号に帰すること以外ではないということが要点でしょう。

こうして、三心を具えるということは、実は名号に帰することなのだそうです。このような三心の了解によつて、「しかれば、三心といふは身命を捨て、念仏申より外には別の子細なし」（『播州法語集』一五）ということになり、凡夫が至純の三心を具えなければならないという問題を解決したのでした。

以上のように、一遍は信不信を問わず名号さえ唱えれば往生できるのだという、単純でも力強い救いを強調していたのを見ましたが、その様子を説く一遍の言葉を一つだけあげれば、次の法語があります。

又云、或人、浄土宗の流々の異義を尋申して、「何にか付べき」と云々。上人答ていはく、「異義まちまちなる事は、我執の前の事なり。南無阿弥陀仏の名号には義なし。義によりて往生する事ならば、尤此尋は有べし。全く往生は義によらず、名号によるなり。たとひ法師が勧むる名号を信じたるは往生せじと心には思ふとも、念仏申さは往生すべし。いかなるえせ義を口にいふとも、心に思ふとも、名号は義によらず、心によらざる法なれば、

称すれば決定往生すると信じたるなり。たとへば、火を物に付んに、心にはやけなとおもひ、口にはやけそといふとも、此言にもよらず、念力にもよらず、只火のおのれなりの徳として物をやくなり。水の物をぬらすも、是に同じ事也。然のごとく名号もおのれなりに、往生の功能をもちたれば、努々義にもよらず、心にもよらず、言にもよらず、唱ふれば往生するを、他力不思議の行と信ずるなり。『播州法語集』、八〇）

一遍はここで、教えの解釈（義）によつて往生するのではまったくないといひ、人がどのように考えあるいは言うとしても、名号の「おのれなり」の徳もしくは功能によつて、名号を唱えさえすれば往生するのだと強調しています。それは自己の思い・はからいを徹底して放下した、すがすがしい境地でさえあつたでしょう。一遍と親鸞とは、名号と信心という違いはあるものの、どちらも自己の計らいを徹底的に放ち捨てて、弥陀の大悲に一切まかせるといふ点では、共通のものがあると思います。

一遍上人の遊行の跡

熊野での宗教体験を経て、その後は、一所不住の教化の旅となります。一遍の最晩年の頃の歌に、「旅衣木のねかやのねいづくにか身のすてられぬところあるべき」とあるほどです。その間、次第に一遍についてともに旅する者も増えてくるわけです。

熊野からいったん伊予に戻り、それから九州の聖達のもとに行き、以後、九州をまわります。聖達にはこのとき、前の「十一不二頌」の内容について、説明しています。また、大隅八幡宮（鹿児島県）に詣でて神示を受けてなつた歌に、「とことには南無阿弥陀仏ととふればなもあみだぶにむまれこそすれ」があります。弘安元年（一二七八）

以後は、中国地方から京都を経て、信州に向かいます。弘安二年、信州小田切の里で初めて踊り念仏が自然発生的に行われ、以後、生涯にわたってこの踊り念仏を行っています。信州から東北に入り、やがて弘安五年（一二八二）には鎌倉に入ろうとしましたが、時の幕府の方針により果たせませんでした。その後、三島に出て、尾張、近江、京都とまわり、さらには山陽地方にも足を伸ばしています。

弘安九年（一二八六）、再び四天王寺に参詣、さらに磯長の聖徳太子廟（大阪府南河内郡太子町叡福寺）に三日間参籠、不思議の事もあったといえます。

そのときのことを、『一遍聖絵』によって見ておきましょう。

さて、太子御墓に参りて、三日参籠し給ふ。第三日、日中の後、御廟を拝し給ふ時、奇瑞ありければ、他阿弥陀仏一人にしましてかさねて日中の礼讃を勤行し給ふ。……高野大師の御記に云く、「西土之三尊、垂権跡於馬台、東家之四輩、成菩提於安楽」と侍る事、おもひあはせられ侍りけり。

高野大師の御記というのは、空海の『上宮太子廟参拜記』というのですが、実際は空海之作ではなく、後世の仮託のようです。その言葉の意味は、西方極楽浄土の阿弥陀仏三尊は、阿弥陀仏が聖徳太子の母、観音菩薩が聖徳太子、勢至菩薩が聖徳太子の妃となつて日本に現れ、この廟にお祀りされた。この国の出家・在家の男女は、その導きのおかげで、極楽浄土に往生しそこで仏となることができる、ということです。

実は一遍がお詣りしたこの磯長廟から、平安時代中頃、大体一〇〇〇年の頃に『廟窟偈』というものが発見されました。それは、「大慈と大悲は本誓願、衆生を愍念すること一子の如し」から始まって、やはり太子自身は救世観音、妻は勢至、母は弥陀である。真如と真実はもと一体であり、それが弥陀・観音・勢至の三つの姿になつて現われても、もともと同一の身である、と述べているものです。日本での縁が尽きたので西方浄土に帰るが、末世の

衆生を救うために父母から受けた肉親を磯長の廟窟に留めておく。この地に一度参詣するものは必ず惡道を離れて極樂に往生するともいうのです（赤松俊秀『親鸞』人物叢書六五、吉川弘文館、昭和三六年）。實際は、それが発見されたといっている頃に、作られたものなのでしょう。とにかく聖德太子は、極樂往生を実現してくださる觀音様として信仰されていたのです。

そのほか、聖德太子と浄土教について、少しまとめておきます。前にも申したように、聖德太子の建立した四天王寺は、極樂浄土と対面していると考えられていました。また、『一遍聖絵』にも出てくるのですが、『四天王寺御手印縁起』（本願縁起ともいう）というものがあって、そこに、「もしは一香一華をささげて恭敬供養し、もしは一塊一塵を以て此の場に抛入し、遙かに寺名を聞き、遠く見て拝忝す、斯の如き等の者は、一浄土の縁を結ぶ」とあります。もちろん本当に聖德太子が印を押したのではなく、やはり一〇〇〇年前後の頃に作られたものらしいです。

なお、一遍が比較的早い時期に参拝した善光寺も、聖德太子と結びついています。善光寺の本尊は弥陀三尊で、伝説によれば、聖德太子と善光寺如来とが詩のやりとりをしたということです。その詩の内容によると、聖德太子も浄土教信者であったということになります。こうしたことから、善光寺と聖德太子は一体となって、人々の極樂往生を助けるとの理解が生れたようです。なお、寂心の『日本往生極樂記』でも、筆頭に聖德太子があげられています。

そのような理解もあって、やがて聖德太子は信者どころか、弥陀三尊の一、救世觀音の化身であると考えられていったのでしょう。救世觀音は衆生を極樂浄土に導いて下さる方で、親鸞も、『皇太子聖德奉讃』の和讃には、「救世觀音大菩薩、聖德皇と示現して、多々のごとくすてずして、阿摩のごとくにそひたまふ」「聖德皇のあはれみて、仏智不思議の誓願に、すすめいれしめたまひてぞ、住正定聚の身となれる」等があります。親鸞は聖德太子の

本地とされる如意輪観音を本尊とする六角堂に百日籠つて、一つの夢告を得て、比叡山を下り、法然のもとに通い始めて、ついに浄土教へと入ったのでした。なお、如意輪観音は救世観音のこととも救世観音の化身ともいわれ、この辺は若干錯綜していますが、ともあれ救世観音と同じ存在と見てよいでしょう。

一遍上人の書写山参拝

この磯長廟参拝の後、再度、山陽方面に旅をし、弘安一〇年（一二八七）に播磨（姫路市）の書写山に参詣したのです。では書写山で、どのようなことがあったのでしょうか。ようやく、『一遍聖絵』のその段を読む準備ができたと思います。そこには次のようにあります。

弘安十年のはる、播磨の国書写山に参詣し給ふ。この寺の縁起に云く、「大聖文殊異僧に化現して性空上人に誘へて云く、「山名書写、鷲頭分土、峰号一乗、鶏足送雲、踏此山者、發菩提心、攀此峰者、清六情根、云々」。又、天人紅桜の木を礼して唱偈云く、「稽首生木如意輪、能満有情福寿願、亦満往生極樂願、百千俱胝心所念」。まことにこれ一乗純熟の勝地、六根清浄の霊場也。ひじり渴仰のあまり、本尊を拝したてまつるべき所望ありけるに、「久修練行の常住僧のほか、余人すべてこれを持したてまつることなし。後白川法皇、承安四年に七日御参籠の時、本尊並びに香水の巖嶺叡覧ありしほかは、尊貴高德を論ぜず、かつて其の例なき」よし、寺僧申しければ、聖、冥慮をあふぎ祈請をいたして、四句の偈、一首の歌をたてまつり給ふ。其の詞に云く、「書写即是解脱山、八葉妙法心蓮故、性空即是涅槃聖、六字宝号無生故」「かきうつすやまはたかねの空にきえてふでもおよばぬ月ぞすみける」。本尊納受し給ひけるにや、寺僧ことさら評定して、「この聖のことは他に異なり、所望黙止しがた

し」とて、ゆるしたてまつりければ、紙燭さしてひとり内陣にいり給ふ。本尊等を拝したてまつり、落涙していで給ひけり。人みなおくゆかしくぞ思ひ侍りける。聖のたまひけるは、「上人の仏法修行の霊徳、ことばもおよびがたし。諸国遊行の思ひで、ただ当山巡礼にあり」と一夜行法して、あくれば御山をいで給ひけるに、春の雪おもしろくふり侍りければ、「世にふればやがてきえゆくあはゆきの身にしられたる春のそらかな」。

これによりますと、一遍は如意輪観音とも感應しうるような性空の霊的な高さを尊崇して、しかもその如意輪観音像をどうしても礼拝したいと考えたようです。和歌の「かきうつすやまはたかねの空にきえてふでもおよばぬ月ぞすみける」は、どこまでも性空を讃えるとともに、性空を月で表現したことは、やはり和泉式部の歌をふまえたものでしょう。漢詩でも性空を大いに讃えています。後半に「性空即是涅槃聖、六字宝号無生故」というところには、性空もまた名号に基づいて往生を果した方だと見たようです。性空はどちらかというと法華行者であり、『日本法華験記』によっても、亡くなる時は『法華経』を誦して示寂したと伝えています。しかし一方で性空は、胸の間に阿弥陀仏を彫刻していたともあり、如意輪観音に関するお告げから考えても、極楽往生を心にあつたことを推測してもけつして間違ひとは言えないと思います。当時の天台宗の僧らの大半は、朝題目に夕念仏であつたり、現世は法華に依拠し後世は弥陀を頼んだり、という仕方ではなかつたかと思われ、死後については極楽往生を望んでいたものでした。その代表が性空と親密な間柄にあつた源信でしょうし、性空の弟子の平願もそうでした。こうして一遍は、「上人の仏法修行の霊徳、ことばもおよびがたし。諸国遊行の思ひで、ただ当山巡礼にあり」と一夜行法して、あくれば御山をいで給うたのでした。この一遍の感銘の内容やその背景をあらためて考えてみますに、私の考えですが、もし性空が如意輪観音を感得した人でなくひたすら法華の行者であるだけであつたら、どんなに霊的な境界が高かつたとしても一遍が尊崇することはなかつたでしょう。やはり、「亦満往生極樂願」で

ある如意輪觀音と感応道交した方だったから、そこに感銘を深くしていたのだと思います。

その觀音菩薩の礼拝は、六十万人決定往生、実は一切衆生決定往生を訴えようとした一遍を側面から支えたことでしよう。しかも如意輪觀音は、聖德太子の本地と考えられているのです。聖德太子もまた、一切衆生の極樂往生を助ける存在であつたわけです。

また、この如意輪觀音を感得した性空は、六根清淨の修行者であるだけでなく、源信と深い交わりを持ち、また和泉式部の精神的な支えでありました。その和泉式部は熊野の神に救われるのですが、その救いは一遍の信不信を問わない救いとどこかでつながっていて、ゆえに一遍はそのような縁を性空に感じていたとしてもおかしくはありません。一遍は、書写山の僧以外では、後白河法皇のみがその本尊を拝したことを告げられたわけですが、その後白河法皇は、聖德太子が始めたともいわれる今様の愛好者であり、『梁塵秘抄』は遊女の救い、ひいては一切衆生の救いが一つのテーマであつたことをも、一遍は知っていたことでしょう。一遍はそうした、さまざまな、歴史的に重層的な文化を背景に、書写山の本尊・如意輪觀音をじかに礼拝したのであり、そのことが「諸国遊行の思ひで、ただ当山巡礼にあり」という言葉になったのだと思うのです。

一遍はここで、一夜行法したとあります。念仏三昧に入らる中で、ひそかに性空と対面したのかもしれませんが。あるいは、読經し念仏してねんごろに供養したのでしょうか。翌朝、書写山を後にすると、春の淡雪がちらついたとのことでした。そこで詠まれた歌が、「世にふればやがてさえゆくあはゆきの身にしられたる春のそらかな」という、どこまでも透명한、この世への執心をまったく離れてしまったような心境を示すのでした。このこともまた、書写山のお詣りが自分のこれまでの生涯のすべてとほとんど同じ重さのものであつたことを、示唆しているように思われます。

最後の一遍上人

このあと、一遍は姫路市白浜町にある、京都の石清水八幡宮の別宮である松原八幡宮において、「別願（弥陀の第一八願）和讃」といわれる念仏の和讃を作り、弟子たちに与えます。その和讃は、

身を観ずれば水のあは、きえぬるのちは人ぞなき、命を思へば月のかげ、いでいるいきにぞとどまらぬ、……ではじまるものです。無常感が、非常に美しい、透徹した文で語られています。時宗でもっとも重んじられる和讃です。中に、

名号酬因の報身は、凡夫出離の仏なり、十方衆生の願なれば、ひとりももるとがぞなき、別願超世の名号は、他力不思議の力にて、口にまかせて唱ふれば、声に生死の罪きえぬ。

とあります。

その後、正応元年（一二八八）には伊予に渡って菅生の岩屋寺をお詣りするなどしていますが、一二月に愛媛県と広島県の間にある大三島の大山祇神社にお詣りしました。一遍の祖父も深く信仰した神社です。その翌年一月になって、この大三島社にお仕えする僧・長観に夢のお告げがありました。それは、「古へは書写の上人、この処にまうでて説戒ありしによりて、鹿の贄をとどめをはりぬ。今、一遍上人参詣して、桜会の日、大行道にたち大念仏申す。この所にして衆生を済度せしめむとするなり。これに値遇、合力せざらん輩は後悔あるべからず」というものです。しかもその地域で同じ夢のお告げを受けた人が、数人は出たといいます。そこで一遍はこの社に二月九日ということですが桜会に招かれ、神に魚・鳥などを供えることをやめるべきことなど説きました。その言葉は、

人々が夢に見た言葉と寸分違わぬものだったのです。そこで人々は、

昔をおもへば、永観二年に叡山の湛延ならびに性空上人あひともに参詣し給ひて、七日説戒し、不殺生戒を授けたてまつられし時、御宝殿振動して「随喜随云不殺」と唱へ給ふ御音ありき。それよりこのかた恒例の贊を留め給ひて、仏経供養を行はるるところなり。いまた霊夢のつげ、昔にかはらず感応のおもむきあらたなるうへは、……

といつて、あらたな禁止事項を記録にとどめたということです。あらゆるいのちを大切にす精神が、性空と一遍とによって強調されていますし、性空と一遍とが靈的に通い合っている、深い関係をみることができます。

このあと一遍は、最終的に、兵庫の観音堂に滞在します。すでに大三島社にお詣りする前、正応元年（一二八八）の年に繁多寺にお詣りしたとき、三日参籠して、父からゆずられた、証空の訓点を記録した浄土三部経をこの寺に奉納していますが、この観音堂でも、たまたまいたのかついでにきていたのか、書写山の僧に持っていた少しの經典をわたします。前に、磯長の太子堂におまいりしたあと、当麻寺にお詣りしていますが、このとき、かの当麻曼茶羅を一夜にして織り上げたという中将姫が自筆で写した千巻のうちの一つ、『称讃浄土経』（阿弥陀経の異訳・玄奘訳）をその当麻寺の僧からもらっています。このとき書写山の僧に渡したものは、主にそれでした。さらに經典以外の他の書籍等は焼いてしまつて、「一代聖教みなつきて、南無阿弥陀仏になりはてぬ」と言つたとのことです。それは正応二年（一二八九）八月一〇日のことでしたが、その後、八月二三日に禪定に入るが如く往生したと伝えられています。今日の真光寺が一遍終焉の地とされています。神戸や姫路等、この地域一帯が、一遍と大変深い関係にあることがお解りいただけたかと存じます。

むすび

以上、書写山の一遍上人ということで、書写山を開いた性空上人と、一遍上人の若干の事績を中心に、ご紹介させていただきます。そこには、法華と浄土、観音と聖徳太子等々、仏教思想・文化をめぐるさまざまな話題があり、『今昔物語』や『十訓抄』、『梁塵秘抄』やお能の謡曲などの文学も大いにかかわっていたりして、興味尽きないものがあります。しかも性空上人以来、特に一遍上人の劇的な参拝によって、書写山は実に一切衆生極楽往生の祈りの場であるのであり、一切衆生の救いの祈りの場であるというべきです。その意味でも、書写山は姫路城に勝るとも劣らない、貴重な文化遺産・歴史遺産だと思ふのです。

本日は、雑ばくなお話で恐縮ですが、以上にて、私のお話しを終わります。
ご清聴まことにありがとうございます。

（東洋大学文化講演会 in 姫路、二〇一〇年一月二六日、姫路市市民会館）